久保田万太郎における〈空襲〉

石川　巧

一

久保田万太郎は、その生涯において三度の罹災を経験している。はじめて住居を焼け出されたのは二九歳（大正7年2月）のとき。隣家からの類焼によって浅草区田原町の生家を失った万太郎は、橋場にある喜多村緑郎方に仮寓したのち、大阪にいた畏友・水上瀧太郎のもとに半月ほど身を寄せている。[1] 二度目は大正一二年九月一日の関東大震災。当時、浅草区北三筋町の貸家に棲んでいた万太郎は、震災翌日に燃え広がった焔に追われて牛込区南榎町へと避難する。同年一一月には、それまで同居していた両親、弟妹と別れて市外日暮里渡辺町に居を構え、妻子と三人の暮らしをはじめている。のちに万太郎は、随筆「二度あることは三度目のこと」（「オール読物」昭和21年2月）でそれぞれの体験を振り返り、

――二十九のときは、隣から出た火で焼けたので、たまくゝ雪のふる晩でしたが、辛うじて二階の窓から屋根に遁れ、屋根から往来に飛下りて助かりました。それほど火のまはり方が早かつたのでございます。（中略）三十五のとき震災のとばッちりをうけたのでした。大ていこゝは大丈夫と思ふが、とにかく一応はと、近所隣の立退くのにならつて体だけ立退いたあと、あくる日になつて……すなはち九月二日の朝になつて、おもひもよらない方角からもえて来た火のために大丈夫のはずが焼けました。ですから、まへのときのやうな危い思ひはしなかつたものゝ、たのしみに思つた隣の蔵が落ち、ためにこのときも、鞄に入れてもつて出たこまくしたもの以外、本、衣類、諸道具、何もかもきれいに焼いてしまひました。

と述べている。そこには、「大丈夫」と思っていたことが一瞬のうちに「大丈夫」でなくなること、「おもひもよらない」ことが起こって「何もかもきれいに」なくなることの空恐ろしさが綴られている。日々の暮らしは盤石なものとしてあるわけではなく、偶発的な出来事によって簡単に損なわれてしまうのだという確信めいたものが示されている。

二度にわたって家財道具、書籍、原稿を焼失した万太郎にとって、昭和二〇年五月二四日の空襲[2]は、ある意味、場慣れした自分に

気づかされる体験だったようである。前掲「二度あることは三度目のこと」で、このときの空襲を回顧した万太郎は、三田綱町の自宅に火の手が迫ってきたときの緊迫した状況や「手当り次第の品物」を防空壕に投げ込もうとする家族のようすを克明に描写する一方、それを冷やかに見つめるもうひとりの自分がいたことを吐露するように、「わたくしも、とッさに本のことを思ひました。が、すぐに〝止さう〟と頭をふりました。All or Nothing……五冊や六冊もちだしたところではじまりません。……却つてきッと思ひの種になります……／すなはち、わたくしの手は、いつも旅行をするときの鞄を一つ下げたゞけ……／それッきりでした」と記す。かつて罹災したときは着の身着のままで逃げるしかなかったが、空襲のときは「上海でこしらへた一番いゝ洋服を着、春の外套を纏ひ、戦争中戦闘帽の代りにかぶりぬいたソフトをちやんとかぶってをつた」し、「書きかけの戯曲の原稿」もあらかじめその小さな鞄にしまってあったと述べる。

このとき失った家は、同年三月に小川町の「暗いせゝッこましい家」（「大仁にて」（「苦楽」昭和22年1月）からやっと引っ越すことのできた「二階建のあかるき家」（自筆年譜より）であり、慶應義塾に近いこともあって、万太郎にとってはことのほか愛着のある物件だったようである。また、万太郎は罹災した直後の六月に父を、終戦の日となる八月一五日には母を亡くしている。[3] 七月からは、折口信夫とともに運輸省主催の交通道徳昂揚運動に協力し、いたるところで空襲を受けながら名古屋鉄道局管内を巡回するなど、あらゆるものが焼けてなくなり、自分自身もいつ死ぬかわからないという極限状況のなかで、その日その日を必死に生き延びている。

だが、この随筆には失ったものへの未練や執着がいっさい綴られないどころか、「思ひ」を残すことそれ自体が強く警戒されている。随筆の後半、避難先となった慶応義塾構内[4]の食堂で「朝の食事に、舌をやくやうなあつい味噌汁」を啜り、帝国ホテルで開催された会合で「何ら昨日とかはることなく、太だ屈託なく談笑しつゝ、スープの匙をとり上げることのできた」ときの安堵に焦点をあてた万太郎は、

……いへば戦列をはなれたといつた感じ。……これでいゝ、これで一ト役すましたのだといつた安心。……ほッとした気もちばかりがさきに立つて、ちッともその焼けだされのみじめさが身にしみて来ないのでした。／勿論、／――これでいゝのか？／と、わたくしは、しばく罹災証明書の入つたかくしを外からそッと押へて、その間、自分の胸に聞きました。が、その都度、それにこたへてくれたのは、二十九のときの、三十五のときの、……嘗ての日のあの、世にもあはれだつたわたくしの存在でした。……二度までうちひしがれたわたくしの希望でした。（中略）／いまだにわたくしは、その鞄を下げて、慌しく来ては去る〝毎日〟の中に放浪してをります。……その来ては去る〝毎日〟の中にわたくしのみつけ出せるのは、〝昨日〟でもなければ〝明日〟でもなく、じつに〝今日〟といふ日だけであります。

と語り、かつての「世にもあはれだつたわたくしの存在」がいまを支えていることを再確認するのである。

ここでの「いまだに、わたくしは、その鞄を下げて、慌しく来ては去る〝毎日〟のなかに放浪してをります」という一節には、戦後という時空にたいする彼の率直な認識が刻まれている。二度にわたる罹災の経験が戦時下を生き延びる糧になったという直観と、「戦列をはなれた」と感じる自分への微かなうしろめたさを同時に引き受けつつ、戦争が終わったいまも自分は小さな鞄ひとつ下げて「放浪」し続けているという思いだけは見失うまいとしている。

万太郎は、戦時中、日本文学報国会[5]の劇文学部幹事長に就任し、岸田國士[6]らとともに演劇界を担って大政翼賛運動に参加した人物である。昭和一七年四月には内閣情報局の斡旋で約一ヶ月にわたって満洲に渡り、軍関係の要人と満洲国の「建国」に関する懇談、座談会を重ね、翌年にも同じ立場で上海に赴いている[7]。昭和一七年六月一八日に日比谷公会堂で挙行された日本文学報国会の発会式では宣誓文を朗読し、情報局が統合した演劇雑誌社（日本演劇社）に入社したあとは、急逝した岡鬼太郎の後任として社長にも就任している[8]。

だが、万太郎は戦時中における自らの言動を恥じたり戦争に敗れたことの無念さを語ったりすることもなければ、表現者としての自由を手に入れることができた歓びや解放感を口にすることもなかった。そこにあるのは、戦時中のある時期から持続してきた思考の枠組み、認識のあり方をひたむきに持続すること、すなわち、戦中と戦後のあいだに断層をつくるまいとする意志であった。

注目したいのは、万太郎がこのような「希望」を手に入れる契機に空襲体験が深く関与しており、事実、戦争末期の彼が数多くの作品で空襲を警戒しながら生活する市井人の日常を描いていることである。たとえば、随筆「精進揚」（シリーズ題「かまくら雑記」。「餅」「影」「波」とともに「劇場」昭和21年3月に発表）で、大阪ビルに入っていた文藝春秋社に小説「霜しづく」の原稿を届けたときのことを回顧した万太郎は、担当者が「――お預りはします。……金庫の中に入れて置きます。……が、どのみちこの建物は爆弾でやられるだらうと思ひます。／……ですから、そのときは……」と言ったことにふれ、「この対談のあと一ト月あまりして終戦になつた。それまでにも屢々空襲はつゞいたが、幸ひに大阪ビルは被害をまぬかれた。従つてわたくしの原稿も安全だつた」と記したあと、「戦争中、戦争つ気のない小説を書いた。といふところにわたくしの味噌はあつたのだが、戦争のすんだいまとなつては、その味噌に何んの値打もなくなつた。所詮は宵越しの精進揚である」と結んでいる。

この文面は、のちに『久保田万太郎全集 第十八巻』「後記」（好学社、昭和24年12月）で「霜しづく」（「文藝春秋」別冊1・昭和21年2月）に言及した場面でも、

――わたくしは、罹災してさばくした。いへば戦列をはなれた

といふ、これでいゝ、これでもう役ずみだといふ安心感のうちに住むことができた。といふのも、何もかも灰にしてしまつたいまとなつては、どッちにしたつて勝てる戦争ではなし、あとはもう必要によつて、いさくさなしに、いのちを捨てものにすればそれでいゝのだ。……と、明日への希望を全くうしなつたわたくしは、すなはち、〝書置〟をでも……自分への〝追悼文〟をでも書くやうなつもりで、心しづかにこれを書いて行つた。／……といつたら、読者諸兄姉はあるひはおわらひかも知れないが……／尚、この作の発表経緯について、〝かまくら雑記〟（第十七巻に収載）のある項に、わたくしは、つぎのやうにしるしてゐる。／――戦争中、戦争つ気のない小説を書いた、といふところにわたくしの味噌はあつたのだが、戦争のすんだいまとなつては、その味噌に何んの値打もなくなつた。所詮は宵越しの精進揚である。／……いくら、〝心しづかに〟書いたつもりでも、いまみると、随分と記述のうへで均斉を欠いてゐる。矢つ張、それだけ、神経は疲れてゐたのである……。

というかたちで引用されており、その思い入れの深さがわかる。万太郎は、連日のように空襲が続く生活のなかで敢えて「戦争つ気のない小説」を書くことに拘泥し、それを心の支えとして戦時下を生きぬいた。いまとなってしまえば、それは「宵越しの精進揚」に過ぎないかもしれないが、空襲に怯えながら暮らしていた人々のなかには「いのちを捨てものにすればそれでいゝ」という感覚があり、それが辛い日々の支えにもなっていた。万太郎にとっての空襲は、それを確信させてくれる体験だったのである。

二

日本が太平洋戦争に突入しつつあった時期に発表した小説「よこぐも」（「モダン日本」昭和16年9・10月）以降、万太郎は小説、戯曲に「事変下の東京、及び、東京人のすがた」（『久保田万太郎全集 第十五巻』「後記」、好学社・昭和23年12月）を描くことをライフワークとし、特に首都圏への空襲が頻発するようになってからは、意地を張るように「戦争つ気のない」ものを書き続けている。当時の状況に思いを巡らせる多くの人々が想像する恐怖、いつ来襲するかわからない爆撃機に怯えながら暮らしていたに違いないという先入観を逆手にとるように、落ち着き払った日常を生きる市井人の動静に迫っている。たとえば、「よこぐも」（前掲）には次のような場面がある。

途端に、喜之さん、一トあし外へ出ると、雷門にも、仲見世にも、仁王門にも、観音さまのお堂の上にも、そして三社さまの鳥居のまへにも、〝千人針〟の一ト針づゝを往来の人にたのんでゐる若い女の、けなげな、いぢらしい影の日一日とふえて行くのが目にしみた。あなたのところは大ぜいお客が来るからと、毎日のや

うに、はうぐくからよせがきのための日の丸の旗がもちこまれた。その度毎に、喜之さんは、手を真つ黒にして墨を磨つた。……／——ねえ、先生、おねがひだ、こんど来るとき、あんたのこれならいゝと思つた支那の地図を一枚もつて来て下さいな。

巷では、往来の人々に〝千人針〟を頼む女たちの「けなげな」姿がふえはじめ、「日の丸」へのよせがきも毎日のように持ち込まれている。戦争に関する具体的な記述はほとんどないが、それが戦局の拡大と兵士の大量増員を意味していることはすぐにわかる。往来に立つ若い女の「いぢらしい影」やよせがきの墨を磨る男の「真つ黒」な手に焦点をあてることで、兵士を送りだす人々がどれほど夫や息子の無事を祈り、どれほど懸命に生きていたかが伝わる。また、その直後に挿入された「あんたのこれならいゝと思つた支那の地図を一枚もつて来て下さいな」というひと言が挿入されることで、いままさに中国大陸で繰り広げられている苛烈な戦いが想起される。万太郎は俯瞰的な立場から戦況を語ることを戒め、巷の様相や人々の些細な会話のなかからそれを炙りだすことに力を注ぐのである。また、この作品には、

……といふ間にも、花川戸の電車通りのはうから、トラックにのつた歓送の、万歳、万歳といふ声がたえず風に送られて来た。そしてラジオのスピーカーはしきりにいろくの時代の軍歌をうたひつゞけた。／——ほう、なつかしい歌をうたつてゐる。……煙もみえず、雲もなく……日清戦争ですよ。……へんな気がするなァ、全く……／喜之さんは、じッと目をつぶり、その辺らぬ日の歌のなかにおのづと溶けこんで行く自分を寂しくくみまもつた。

という描写もある。トラックを見送る人々の「万歳、万歳」という歓声やラジオから響いてくる威勢のよい軍歌によって、街は奇妙な昂揚感に包まれている。だが、その直後、喜之という登場人物の内面に視点を移動させた語り手は、「……へんな気がするなァ、全く……」という呟きを聞き届けたうえで、「返らぬ日の歌のなかにおのづと溶けこんでいく自分を寂しくみまもつた」という意味深長な言葉を発する。喜之は肺を病んで死の床についていたのである。

続く収束部、喜之は「わたしのやうな、身勝手な、下らない、何んの役にも立たない奴のいつまでうろく生きてることはないんだ。早く死んだはうがいゝんだ。そのはうが日本のためだ」という言葉を残して息を引きとる。作品は、「威勢のよい軍歌」とともに戦場へと向かう兵士と、兵士にもなれない役立たずとして死んでいく人間の惨めさを対照化するようにして終わる。

戦時下の不穏な空気を描いた作品という点では、戯曲「波しぶき」[9]も重要である。日本が大陸への進行を続けていた時期を描いた「よこぐも」に対して、「波しぶき」は「昭和十二年冬——昭和十六年」にかけての東京・鎌倉を舞台としており、すでに太平洋戦争の足音が近づきつつある状況を描いている。当然、巷の人々のあいだに漂う悲愴感

も高まっている。

……停車場の中、しだいにガヤ〳〵して来る……そこへまた、在郷軍人だの、国防婦人だのゝ拵へをしたもの、三人、五人づゝで来る。（中略）……ト、このとき、列車の近づく音きこえ、間もなく四時二十五分、東京からの下り着く……／間。／……戦歿軍人の遺骨が到着したのである。／間。／一行、その出迎への人たちの両側にならんだ中をしづ〳〵停車場からでゝ来る。おはまも、おまさも、桜の下に立つて、つゝましく、ともぐ〵弔意を表す。／間。／おまさ（突然）あッ！……／……ト、おもはず、声を上げ、ふら〳〵と、おはまの肩に倒れかける。……なぜなら、その一行の、白い布でつゝまれたその遺骨の箱をさゝげもつた国民服のぬしの顔のつゆ疑ふべくもない吉三郎だつたから。／おはまおはまさん……（ト、あわてゝそれを支へる……とゝもに、惘然と……信じ切れない目をあげてともぐ〵み送る）／……勿論、だれも、その小さな出来事（観客にとつてはしかし大きな出来事）に気がつかない。／……そのまゝ、一行は、しづ〳〵と……しづ〳〵と寂しく二人の前を通つて行く。

「波しぶき」が活字として読者のもとに届けられたのは昭和一八年六月である。前月には聯合艦隊司令長官・山本五十六の戦死やアッツ島守備隊の玉砕が伝えられ、中学生以上の学徒勤労動員が決定している。翌七月には八機のB25によって幌筵島（ぱらむしるとう）が空襲され、以後、日本本土への空襲が始まっている。世はまさに国民総動員体制が日ごとに強化されつつあった時期である。万太郎は、そうした緊迫した状況のなか、敢えて「昭和十六年秋」の日本を現出させることにこだわる。わずか二年弱の時差ではあるが、この作品を目にした読者、すなわち、太平洋戦争開戦後の日本にもたらされる惨劇の数々を知る読者にとって、その二年弱がもつ意味は決定的だったはずである。ここで「戦没軍人の遺骨」が通り過ぎる様子を「惘然と」見送る人々の沈黙。それは、単なる「弔意」ではなく昭和一八年六月という現実を生きている人々が二年前のあの頃からすでに始まっていた敗走・玉砕への道筋を辿り直す視線とともに醸成されているのである。

さらに、同じ系統に属する作品としては戯曲「月の下」（文学新報三『月の下』小山書店・昭和19年10月）がある。この作品の舞台は「昭和十八年晩夏」の「浅草山谷附近」。「波しぶき」から二年後にあたる。作品内には食糧増産のスローガン、配給、勤労奉仕、防護団、待避壕、警戒警報のサイレン、「軍属になつてシナへ行く」職人などが描きこまれ、銃後に暮らす人々の逼迫したようすが至るところから伝わってくる。ここで万太郎は、登場人物に「東京の、それもこゝいらの人間は、いくら平生てん〳〵ばら〳〵でも、いざ何かあるとすぐ結びつく。……誰にいひつけられなくつてもだ。……震災のときがさうだつた」「いまは戦争だ。……戦争がいまの、その大きな何かなんだ。……つまり、みんな、戦争といふ大騒動のまへに、いはずかたらずに手を組んだり、

肩をかゝへたりして立つてゐるんだ。……おかげで、おたがひ同士、正直に、親切に、いたはり深くなつたんだ……」などといわせ、「戦争という大騒動」によって人々のなかに平時以上の紐帯が生まれていると語る。人は好きこのんで他人と結びつくのではなく、より大きな困難の前でわが身を守ろうとするあまり、同じことを考えている周辺の人々と共闘することを択ぶというわけである。

この作品には五年にわたって「弾丸の下をくゞつ」たのち、伍長となって東京に戻った喜一という帰還兵が登場し、戦場ではいろいろ「面白いこと」があったのだろうと好奇のまなざしを向ける幼馴染に、「俺が変つたよりも東京のけしきのはうがもッとかはつてる」といわせる場面がある。興味深いのは、そんな喜一と幼馴染の友七が交わす次のような会話である。

喜一　しかし、よかつたなァ……（ト、突然、空をみ上げる）
友七　えエ？……
喜一　警戒警報解除になつてさ……
友七　といつて油断をしちやァいけないんだ。
喜一　油断ぢやァない、安心だ……
友七　安心だつていけない……
喜一　どうして？……安心するつてことは油断ぢやァない……

ここで「油断をしちやァいけないんだ」とたしなめる友七は、誰彼ともなく教えられた銃後の思想に基づいて言葉を発している。その背後には、食糧増産のスローガン、配給、勤労奉仕、防護団などとともに注入された国防の精神がある。一方、東京の記憶が五年前から停止している喜一の目には、それが奇異に映る。喜一は、「安心」と「油断」は似て非なるものだという判断さえできなくなっている友七のなかに、戦時イデオロギーがもたらす洗脳の力をみるのである。

このあと、喜一は独言のように「このごろの東京には、戦争まへの一トつきりのやうなムダなあかりがつかなくなつたんだ……」、「……怖いんだ。……だから、怖いんだ。東京の人間は」と語ってその場を立ち去る。万太郎は、「ムダなあかりがつかなくなつた」という表現に隠喩的機能をもたせながら、それを「怖いんだ」という言葉と接続することによって、人と人が過剰に結びつき、お互いを監視し合わなければならないほど窮屈になりつつある暮らしぶり、ムダをムダのまま許容し続けるだけの余裕をなくしつつある暮らしぶりへの強烈な違和感を暗示するのである。それは、昭和一九年一〇月という時空に生きる万太郎に許された精一杯の表現だったといえるだろう。(10)

三

小説「よこぐも」、戯曲「波しぶき」、そして戯曲「月の下」といった作品で戦時下の東京を描いた万太郎が「東京新聞」の連載小説を引き受け、「樹蔭」の連載を開始したのは昭和一九年六月二八日である。

それまでの作品が、執筆時期から二年ほど遡った過去を作品内時間とし、作品内に流れる時間と読者が暮している時間のタイムラグを効果的に利用する手法で描かれていたのに対して、新聞連載小説という媒体を択んだ万太郎は、ここでついに〝いま〟まさに起こりつつある事態を描くことを決意する。

「樹蔭」は、満洲の奉天に渡って食堂を営んでいる五十吉が「十五年ぶり」に生まれ故郷の浅草に戻ってくるところからはじまる。かつての五十吉は、貧しいながらも新内節太夫の修行に明け暮れ、その技量を高く評価される存在だった。だが、あるとき自分よりも劣る人間が邦楽大会の舞台に抜擢されたことに腹を立て、主催した新聞社に乗り込んで醜態をさらす。家元が金に目が眩んで寄付の多い弟子を抜擢したのを知らず、ひとり暴挙に出てしまうのである。こうして、「身の置きどころを失つた」五十吉は、隠れるように東京から遁走し満洲にわたったのである。

久しぶりの故郷は、すでに街の至るところに戦争の影が忍びより、行き交う人々からは「銃後の玉砕」などという自嘲も聞こえてくる。警戒警報のサイレンにも慣れてしまったようすで、「どうなつたんでせうね、サイパン?……」などと噂し合っている。千葉正昭が「五十吉は、地縁血縁から一五年間も離れていたため、世相を相対化する視点を獲得できる位置に立つことができた異邦人であり、一方で懐旧の記憶の風景に限りなく遡行し、幻影の浅草に浸る人間でもあった」(『樹蔭』論――戦時下の姿勢――」、『記憶の風景――久保田万太郎の小説――』武蔵野書房・平成10年11月)と指摘するように、ここでの五十吉は「異邦人」として雑踏の声に耳を澄ます役割を演じている。また、こうした会話を通して、読者はこの作品がリアルタイムの現実を舞台としていることを知る。

作品の連載期間は九月九日までの二ヶ月余り。すなわち、サイパン陥落によって制空権を失った日本に向けた本土空襲のはじまりと時を同じくしている。「樹蔭」の読者は、目の前の現実と小説世界が縺れ合いながら進行していく感覚とともに作品世界を享受するのである。

万太郎はこの作品において、より切実なものとして空襲の恐怖にさらされる人々の暮らしぶりを描くわけだが、実は「樹蔭」以前にも空襲を予感させる作品は他にもあった。――昭和一七年八月の「中央公論」に発表した戯曲「町の音」のラストシーンがそれである。

おつる　ほんとに、今日は、もッたいないやうな。……昨日のことを思ふと……こんなにも陽気つてちがふもんでせうか、一日で?……

……途端に飛行機の爆音。

おふさ　あら、あんなに低く……(ト、おもはず空をみ上げる)

おつる　えエ?……

おふさ　あすこに……あそこに、それ……

……おふさも、おつるも、ともに目を空へ。

闇。

……爆音つゞく。

作品を読む限り、ここに描かれた「飛行機の爆音」はいかにも唐突であり、読者（および観客）はかなり戸惑ったはずである。だが、のちに万太郎が書いた「後記」（『久保田万太郎全集 第十巻』好学社・昭和24年1月）を読むと、彼がこの場面に託した思いのなかに、「樹蔭」に通じるモチーフがあったことがわかる。そこには、

――雪晴のなかを常次郎が子供たちをぞろ〳〵引連れて朝詣に行き、花屋が来、そして哨戒機の爆音が空高くひゞくといつた條は、〝中央公論〟に載せたときも、その年の十二月、〝文学座〟が国民新劇場（日華事変の拡大するとゝもに……といへば足る……改称を余儀なくされた築地小劇場のことである）でこれを上演したときも、この場はなかつたのである。当時、この場をふやしたことについて、よけいなことをしたものだといふ批評があつたが、そのときもさう思はず、いまでもさうおもつてゐないのは、はじめから、わたくしに、こゝまで書きたいつもりがあつたからである。

とある。「町の音」は、当時、内閣情報局が掲げた国民演劇運動の求めに応じて書かれたものであり、「戦争目的完遂の一手段」という役割を担っていた。だが、万太郎は、内閣情報局の意向に背いてまでも東京の空に哨戒機の爆音がひびく光景を挿入した。作品の構成からしていかにも唐突に映るであろうことを知りながら、敢えて「こゝまで書きたい」という気持ちを押し通した。「わたくしは、さうした動機によつてゞも、この作を書いたことを決していま後悔してゐない。むしろ、よく書いたとさへよろこんでゐる」と記し、たとえ「戦争目的完遂の一手段」であっても、「こゝまで書きたい」と思ったことを表現できたのだから後悔はないと断じたのである。

では、万太郎が「こゝまで書きたい」と思ったのはどのようなことだったのだろうか？ 「後記」には、それが、「太平洋戦争のはじまつたばかりのときの東京の（といつてわるければ東京人の）一部に、うき雲のやうな影を落した虚脱感の、ゆくりなく、この作のなかにうつしとられてゐるからである。／とまれ、どんな動機が、どんな結果を生むかもわからないといふことが、この一トすぢにつながるみちのありがたさである」と書かれている。「町の音」から「樹蔭」に至る作品群に流れているのは、「うき雲のやうな影を落した虚脱感」であり、「爆音」を響かせる飛行機は人々を「虚脱感」に陥れる元凶として意味づけられているのである。もちろん、この「後記」は戦後になってからの記述であり、戦時下の言説とは区別して論じなければならないが、少なくとも、万太郎が回顧的な人情や風情に耽溺するだけの情緒的作家ではないということだけはよく知っておく必要があるだろう。

こうした前提を踏まえて、あらためて「樹蔭」の世界に戻ってみよう。新聞連載小説ということもあり、「樹蔭」における戦争は、しばしば掲載紙である「東京新聞」からの記事引用[11]として提示される。主人

公・五十吉がたまたま「東京新聞」を手に取り戦争関連記事に目を向けるという手法である。

「……時局の急迫とゝもに、勝ち抜く都下の疎開はいまや着々と進捗、第四次疎開のこゝ浅草千束町二丁目地区も、地元の象潟警防団、学徒隊、及び、芝浦労務報国会労士隊などによる連日の汗の敢闘によつて、予定より一ヶ月も早く建物除去工事がすゝみ、かつての歓楽場、国際劇場前の昭和座、楽天地、米久、一直などの劇場、料理屋が、揃ひもそろつて姿を消し、広大な空地とかはつて、七月中には都民の防空空地に更生する。」といふ記事を、上野広小路からこの地下鉄にのるとき買つた東京新聞の夕刊……とことわらなくても、昭和十九年の五月以来、東京で、東京新聞しか夕刊をもつことができなくなつたのだが……のなかにみつけて、五十吉は、／「へえ、あすこいらもか?……」／と、東京の各所にいま行はれてゐる火事場のやうな騒ぎをおもひ浮べ、ひそかに自分につぶやいた。

――かれは、御堂の階段を上つた。大ぜいの参詣人にまじつて大きなあの賽銭箱のまへに立つた。……と、赤、青、白、黄、紫、五色のとばりが内陣のまへに垂れ、そのとばりのまへに、／敵国降伏大秘法修行中／と書いてあつた。／いかに戦局が重大か……／……敵、海より迫る。……二ミツツ攻勢の下、昨年十一月、ギルバート諸島、マキン、タラワ両島を侵し、本年二月、つひにわが領土たる内南洋に入り、マーシャル諸島、ルオット、クエゼリンに来寇したる敵は、機動部隊を操出し、ときに基地航空力を駆使して、三月十七、八日には、トラック島を空襲、同二十三日には、サイパン島外テニアン、グアム島のマリアナ海域を攻撃、三月三十日より三日間にわたつてはパラオ周辺に来寇し来つたが、こえて六月十一日には、太平洋艦隊の主力をすぐれる二十数隻の空母、十数隻の戦艦を結集してサイパン島周辺に再現し、同十五日つひに二度の撃退にもめげず同島への上陸を敢行……と、いまもいま、夕刊でかれは読んだ……／敵国降伏大秘法修行中……／かれの目の、知らずく、その烈しい文字の上に喰ひ入つてゐるのをかれは感じた。／「一生けんめい。……一生けんめいなんだ、みんな……」

前者の記事は、「学徒隊」や「労務報国会労士隊」を動員して歓楽街の建物を除去し、突貫工事で「防空空地」をつくるようすを報じたものである。万太郎は、記事の内容を紹介しつつ、東京では夕刊の発行が制限されていることにも言及する（唯一の夕刊紙が「東京新聞」であるという宣伝も忘れていない）。それを「火事場のやうな騒ぎ」といいつつ、決して誰彼と触れ回るのではなく、「ひそかに自分につぶやくところからは、同時期の緊迫した空気も伝わってくる。

人々は、この工事がきたるべき敵機の襲来に備えてのものだという

ことを知っている。いまだ多くの人々が関東大震災の記憶を有していたこの時代にあって、空襲になれば東京がどのようなことになるかという想定はリアルな感覚をともなっていたはずである。だが、その不安を言葉にすることはできない。言葉にしてしまえば世間からの誹りは免れない。場合によっては非国民扱いされるかもしれない。そこには、本当のことを声に出して言うわけにはいかないという真実が正しく認識されている。

それに対して、後者には作者のシニカルな視線がより直截的に表出している。浅草寺の御堂に足を踏み入れた五十吉は、そこに「敵国降伏大秘法修行中」という貼り紙を見る。ところが、万太郎はその御堂のようすを描写する前に、わざわざ主人公が読んだ夕刊のニュース記事を挿入し、「二度の撃退にもめげず同島への上陸を敢行」といった勇ましい文字が躍るサイパン沖海戦の状況に話題を転じるのである。それは大本営の発表に基づく情報であり、必ずしも信憑性をともなっているわけではないが、記事を目にした国民の多くがいまいちど気概を奮い立たせて銃後の窮乏を耐え忍ぼうとした可能性は充分にある。ここで重要なのは、新聞に書かれていることが真実なのかどうかではなく、記事の内容にどれだけの効果があり、どれだけ人々の心を動かせるかなのである。

このとき、新聞という公共的なメディアの言説と浅草寺の御堂に掲げられた「敵国降伏大秘法修行中」という文字のあいだには、いっさいの垣根がなくなる。新聞の文字それ自体が祈願へと転化する。再び御堂の内部に意識を戻した主人公は、自分がいつのまにか「知らず〳〵、その烈しい文字の上に喰ひ入つてゐる」ことに驚き、「一生けんめい。……一生けんめいなんだ、みんな……」と呟くが、こうした精神主義への依存が人々の追い込まれた状況の裏返しであることはいうまでもない。万太郎は、こうした作為を施すことで、戦争に対する個人的な見解や立場をいっさい表明することなく、その欺瞞性だけを的確に抽出したのである。

しかし、神仏への祈願も虚しく、作品の後半ではラジオからサイパン陥落の報せが流れてくる。万太郎はここでアナウンサーの言葉を忠実に写しとるかのように、「……サイパン島のわが部隊は七月七日早暁より全力をあげて最後の攻撃を敢行、所在の敵を蹂躙し、その一部は、タポーチョ山附近まで突進し、勇戦力闘、敵に多大の損害をあたへ、十六日までに全員壮烈なる戦死をとげたるものと認む。……同島の陸軍部隊指揮官は、陸軍中将齋藤義次、海軍部隊指揮官は海軍少将辻村武久にして、同方面の最高指揮官、海軍中将南雲忠一また同島に於て戦死せり」と記述する。

いまいちど確認しておこう。「樹蔭」が新聞に連載されていたのは昭和一九年六月二八日〜九月九日である。サイパン島における実際の戦闘が行われたのは六月一五日から七月九日にかけてとされている。つまり、このラジオ放送の文面を読んだ読者にとって、それはほんの少し前に起こった生々しい出来事であり、やがて敵が襲来して自分たちの生命を奪うかもしれないという戦慄をともなっていたはずである。(12)

大本営が発表した事実なのだから、引用それ自体を誹謗される筋合いはないが、書き方を間違えば軍部はもとより国民からも断罪されかねぬ不安はあったはずである。万太郎は、危ない橋を渡ることで表現者としての自分を時代に対峙させたのである。その証拠に、作品中には、

「しかし、何んだぜ、これもうちの町会長に聞いたんだが、ものに不自由してるのは、何も、こッちばかりぢやァないらしいんだぜ。……戦争してる国は、どこも、一列一隊らしいんだぜ。……だから、いまやもう、鍔迫合なんださうだ、そのはうでも。……まだしもまだ空襲されないだけ、歩がいゝんださうだ、東京は……」／「といつてる今日にもまた、警戒警報がでゝ、たちまちそれが空襲警報にかはるかも知れない。」／「それァさうさ、空襲必至は、三年まへからお上さまのいつてるセリフだ。」／「いやなんだよ、俺は、そのセリフが……」／と、いきなりまた、千枝は立留つた。……すでに、そのとき、ふたりは、橋の中ほどに達してゐた。／「なぜ?」／と、ともゞ常次郎も立留つた。／「来たら、もう、とても防ぎがつかない、助からない……つて感じだぜ、そのセリフのひゞきは……」／「だつて、お前、そこが覚悟だ。」／「そんな馬鹿なこと。……うそにも、俺は、東京が火の海になるとなんぞ思ひたくないよ。」

といった会話が挿入され、「まだ空襲されないだけ、歩がいゝんださうだ、東京は……」という楽観的な見方が披瀝される一方で、もし空襲になれば「東京が火の海になる」とも言明されている。管見の限り、同時期に書かれた新聞小説のなかでここまではっきりと最悪のシナリオを明記したものは「樹蔭」の他に存在しない。

さきほど引用したラジオ放送の直前には、五十吉が入隊する息子に送った手紙に関するエピソードが披瀝されており、「おやぢの手紙に何んと書いてあつたと思ふ?……たつた一ト言、孤独に徹せよ。……それつきりだ。……と、それをみて、また、あの子、おやぢ、自分のおもつてることをいつてくれました……」[13]という台詞があるが、この「孤独に徹せよ」という言葉は、「樹蔭」を書き継ぐ万太郎が自分自身に言い聞かせた覚悟でもあったように思う。のちに「八・一五の思ひ出」（「新潮」昭和29年9月）という随筆で「樹蔭」に言及した河上徹太郎は、「あれはあの時代に東京新聞の連載でちやんと通つた長篇であるが、今読んでひしひしと胸を打たれるものがある。これを隣保精神の義理人情の陰に隠れた小市民の悲しい諦めだとする批評は、聞かされなくても私の耳に響いて来るが、そんなものぢやない。敵は焼夷弾か東條か知らぬが、それに対する対応の中に、却つて無言のレヂスタンスがここにある。レヂスタンスとは、秘密文書を発行したり、物陰に隠れてピストルを打つことばかりではない。恐らく真正の革命家は、民心のかういふ面を知つてゐるに違ひない。／戦後のわが国民生活には、どんな形でもこのいたはりがない事態の急迫がそこまで行つてゐないといふのだらうか? そんな筈はない。しかも国民がどんな形でで

もいがみあつてゐるのが実情である。して見れば、民衆に実感がないのか、或ひは指導者が観念的に空廻りをしてゐる訳であらう。私が戦後の民主主義も逆コースも共に信じないのは、そのためである」と述べ、「樹蔭」の世界には「無言のレジスタンス」が内在していると述べたが、それは正鵠を射た指摘だといえるだろう。

こうして、空襲の気配はひたひたと「樹蔭」の世界に近づいてくる。電信柱に貼られた「敵機ハ迫ル／敏速ニ」という疎開標語を目にした五十吉が、「整然ト／国民学校の三四年位の書いたとおぼしい、歪んだ、たどくしい…／おそらく、これを書いた子供も、その親たちも、いまごろは、どこかの空で、この住みなれた土地のことを思つてゐるのだらう」と想像する場面をはじめ、「東京が火の海になる」かもしれないという不穏な空気は次第に作品全体を覆いはじめる。ラジオ放送を聴いた五十吉は、「足もとから鳥のとびたつやうな騒ぎ」で満洲に帰る。

注目したいのはこのあとの展開である。作品の最終章は、五十吉が東京で世話になった常次郎に宛てた書簡という形式をかりて事後談が綴られる。彼は、昨年いったん応召されたものの体量の不足で「即日帰郷」となっていた息子が再応召となったことに心を砕き、「身のはれを祝つてやりた」いという思いで奉天へと急いだのである。かつて、盛大な壮行会で見送られながら「即日帰郷」を命ぜられ、肩身の狭い思いをしたであろう息子を慮った彼は、当初、「帰らないでやれ、みてみないふりをしてやれ、そのほうが当人も気が楽にもてるだらう」と考え、「ハルカニ ブジ ニユウタイヲイノル チチ」という電報を懐にしまっていた。だが、「サイパンの放送」を聴いたことで気持ちを取り直し、「マニアフヨフニカエル チチ」と送信したのである。

直接的な言葉では書かれていないが、そこには、入隊する息子を晴れがましく送り出してやりたいという親心と、これで世間に「顔むけ」ができるという思いが混在している。もちろん、五十吉の心の底には、もう二度と息子の顔を見ることはできないかもしれないという忸怩たる思いがあり、「サイパンの放送」が決定的な後押しになったことはいうまでもないが、実際に多くの若者が戦場に送られている現実を前に、新聞小説のなかで未練がましく振る舞う親を描くわけにはいかなかったと思われる。万太郎は、「サイパンの放送」を聴いた五十吉が電報を打ち直すという行為を通して、新聞読者に向けて直接的に語りかけることのできない真意を言葉以外の方法で伝えているのである。

作品のラストシーンでは、「ことのついでに」というかたちで、五十吉が「十五年ぶり」に見た故郷・浅草に抱いた印象が綴られる。――帰京中、田原町で地下鉄を下りて国際劇場周辺を歩いた五十吉は、建物除去工事によって「がらんとした」原っぱで「明治四十四年の春の吉原の大火」に思いを馳せる。それまで、「異邦人」のまなざしで東京の街並みとそこに行き交う人々の不安を凝視していた五十吉は、「山谷から、橋場、玉姫町、さては、千束町、龍泉寺町のはうまで火がのびて、七千戸近いうちが焼け、三千人あまりの死傷者がでたといふあの大火のあとに、かういふけしきの浅草にあつたのをおもひだしました」と語り、自らの記憶に刻まれた光景をまざまざと思い出す。

ここで、空襲に備えて撤去された「花やしき」と関東大震災で倒壊した「十二階」跡地に立ったときの思いを語りはじめた五十吉は、

最近は楽天地といつたのださうですが、とにかく、十二階といへば花やしき、花やしきといへば十二階、わたくしの知つてゐる浅草といへば、この二つにとゞめをさしたものでした。が、その一つは震災でなくなり、一つはこんどの疎開でなくなりました。十二階にしても、たとへ震災のとき無事であつても、こんどの疎開にあへば、一トたまりもなかつたにちがひなく、けつきよく、まぬかれがたき、それだけの運だつたかと存じ候。／その夜の三日月、こよひは、はや、まんげつにちかく、なんとなく秋めいてみえ、おはなしにうかゞひたる豊夫さんのお宅の庭の水の音のどこかにきこゆるこゝちいたされ候。湯島の宅の萩もそろ〳〵もう花をつけるころと存じ候。

それにつけても東京を、

だいじな〳〵東京を、

くれ〴〵も空襲よりおまもり下されたく候。

敬具

昭和十九年八月

と記す。五十吉の筆をかりた万太郎は、身を身を正すような候文で連載小説を締めくくるのである。

のちに、この作品の単行本化（『樹蔭』中央公論社・昭和26年9月）にあたって「あとがき」を加筆した万太郎は、「東京の空にB29のはじめて飛来したのは、そのあとふた月ほどしてからの十一月だつた。だから、まだ、これを書いてゐるときには、空襲がどんなに怖いものかといふことをわれ〳〵はだれも知らなかつたのだが、でも、サイパン東京間一二〇〇余浬、サイパン比島間一五〇〇浬で、基地航空兵力のともに手のとゞく距離になつたといふことがだれの胸をでも暗くして、空襲必至のかけ声ももういまゝでのやうな空念仏ではなくなつた。……となると、警戒警報発令のサイレンでも、一度は二度、二度は三度と、だん〳〵身うちに深刻にこたへて来た」と書いたあと、

……おのづから、わたくしは、その〝不安〟の中にあつて、その〝不安〟を描く義務を感じた。さうしたどたん場に引据ゑられた人のこゝろのいろ〳〵……とくに、そのなかゝら、美しい翳、あかるい襞をみつけだすのも、勿論、その義務の一つだつた。

と振り返り、創作の背景を意味深長に語っている。また、「私の履歴書」（「日本経済新聞」昭和32年1月12日～26日に「明治二十二年――昭和三十三年……」と題して連載）にも、「東京新聞に小説〝樹蔭〟を連載。……毎日、朝五時より正午まで執筆、制作のよろこびにひたる」と記している。空襲によって「東京が火の海になる」かもしれないという予感が人々を支配しつつあった時期に、新聞連載小説という舞台

を与えられた万太郎が描こうとしたもの。それは、〝不安〟であればあるほど研ぎ澄まされてくる「美しい翳」、すなわち、一途に無事を祈り続ける一方で失ったものへの「思ひ」に囚われまいとする前のめりの生き方がもたらす「あかるい襞」だったのだろう。随筆「心残りの記」（「文藝春秋」昭和32年7月～9月）で戦争末期に作った「国をあげてたゝかふ冬に入りにけり」という句を自解した万太郎は、「B29の毎日のやうに来ることのちッとも不思議でなくなつたとき、その家の、いよ〳〵暗く、いよ〳〵以てせゝッこましくなつたとゝもに、坊主憎けりや袈裟までの、その家がいやになつたとしたら、その家のもつ環境のすべてまで、とも〴〵辛抱のできないものになつたのでした。／――おんなし焼けるんなら、こんなところで、オド〳〵しながら焼けることはない。もッとあかるい、カラッとしたところで、サバ〳〵と焼けたほうがいゝ……」と記しているが、その感覚が「美しい翳」や「あかるい襞」といった表現と通底していることはいうまでもない。

四

「樹蔭」を書き終えた万太郎は、妻に逃げられた無名の役者が、男手ひとつで娘を育て、その娘が子役として成長していく姿を見守る小説「子役と雪」（「新太陽」昭和20年1月）、「昭和十八年十二月下旬」の「上海市外」にある警備隊の屯営を舞台に、戦闘に備える兵士たちに焦点をあてた戯曲「霙ふる」[14]、東京中央放送局で放送するために書いたラジオドラマ「りよと九郎右衛門」[15]、先述の小説「霜しづく」などを書くものの、「事変下の東京、及び、東京人のすがた」（前出『久保田万太郎全集 第十五巻』「後記」）を正面から捉えるような作品を書きあげるには至らず、さきに述べ通り、交通道徳昂揚運動の一環で名古屋鉄道局管内の現場を巡回しながら終戦を迎えている。敗戦直後には、焼失を免れた帝国劇場が舞台にかけた菊五郎一座「銀座復興」の脚色・演出に手を染めたりもするが、やはり、創作への本格的な意欲を回復することはできず、旧友の好意で入居することができた鎌倉材木座海岸の外国人屋敷での隠遁生活をはじめる。

そんな万太郎が、戦後はじめて「事変下の東京、及び、東京人のすがた」を描いたのが戯曲「あきくさばなし」（「人間」昭和21年3、4、6月）である。――この作品の舞台は「昭和二十年七月中旬」の東京、「神田区内のある町に於ける「魚庄」の店」と設定されている。「昭和二十年七月中旬」といえば、東京の市街地はほぼ焼き尽くされ、空襲の主要な標的が地方都市へと移っていた時期である。作品の舞台となる「魚庄」も、主人の庄吉が「辛うじていのちをとりとめたほどの大煩ひ」で「半身の自由」を欠いたため休業状態が続いている。

作品の冒頭、庄吉は理髪職人の市太郎に髭を剃らせながら「戦争に喰ッついて来た「空襲」」について語りはじめる。

庄吉　B29だなんて、途方もない、ケタ外れのばけものが飛びだして来ようとなんぞ、去年のいまごろ、だれが思つた？……

さうだらう?……「いゝえ、俺は知つてゐた」といふ奴があつたら、「館林」の下げぢやァないが、「先生、うそばッかり」だ。……みんな、誰しも、不意を喰つたつてことがほんとなんだ。

市太郎　……

庄吉　成程、それァ、「空襲必至」とはいはれてゐた。……二年も、三年もまへから、うるさくいはれてゐた。……そればかりぢやァない、焼夷弾の説明だつて、爆弾の講釈だつて、ちやんと誰も聞かされてゐたんだ。……だからこそ、防空壕も掘れば、火叩きだ、鳶口だ、なんだかんだと下手な大名道具のやうにかざり立てゝ、子供だましのやうなバケツ運びの稽古だつてしたんだ。……一応、ぬかりなく、用意はしたんだ。……が、だ。……がしかし、だ。……そんなことで仕切のつく生優しい勘定ぢやァなかつたんだ。

B29の爆撃力をまざまざと見せつけられている庄吉は、それを「途方もない、ケタ外れのばけもの」とよぶ。去年のいまごろはそんなものが日常的に襲来するなどとは誰も思っていなかったのに、たった一年で世の中は変わってしまった。防空壕を掘ったりバケツ運びの稽古をしたりしてあれこれ対策を練っていたはずだが、何の役にも立たないまま「東京の半分が灰になつてしまつた」と嘆く。また、別の場面では、「今日にもまた、どんなどえらい騒ぎがもち上るかも知れないんだ」と声をあらげる。自分は役立たずだと思っている庄吉は、斜に構えたところから周囲を眺め、世相の変化を敏感に看守する。

このとき庄吉は、いつくるかわからない空襲に怯えながら日々のつつましい生活をしている人々の疲弊を「何かにうしろをみられてゐるやうな」気分だと語る。向こうからはこちらがじっくり観察できているのに、こちらからは向こうの姿がまったく見えず、向こうの気まぐれでこちらの運命が決められてしまうような絶対的な力関係。それこそが空襲なのである。

また、ここで庄吉は、「東京に古く住みついた人間」が「世間」や「体裁」ばかり気にして自分の「肚ん中」を見せないことに憤り、「うれしければ、うれしいと、はッきり遠慮なく、手を叩いてよろこんだらいゝんだ。……かなしければ、かなしいと、それこそありッたけの声をだして泣いたらいゝんだ。うそもかくしもないつてことが人間としてのほんとなんだ」と力説したりもする。

ところが、身の回りの世話をするおしまと丁々発止の掛け合いを演じた庄吉は、「今日はこのごとでのめづらしいお天気の上に、何んとなく空の工合でもしいんとして、どこに戦争があるかつていふやうな気がしますわ」と言うおしまに向かって、「暢気なことをいつちやァいけねえ。……それがいけないんだ、その油断が……」、「えてして、かういふ何事もないときに限つて、先方ぢやァ、ちやんと、それだけのたくらみをしてゐるんだ……」とたしなめる。笑って「そこまで心配したら」ととりなすおしまに、「そろ〳〵大編隊のやつて来る時分なんだ。

……そんなことといつて、怖くねえのか、お前?」と詰め寄る。

庄吉　わらひごとぢやァない。……でなくつても、そろ〳〵大編隊のやつて来る時分なんだ。……そんなことといつて、怖くねえのか、お前?……

おしま　怖ござんすわ。……怖ござんすけど、怖がつてばかりゐたらキリがありませんもの。……何んにも用が足りませんもの。……ですからもう、あたし、来たら来たとき……

ここでの庄吉は、なるほど、「世間」や「体裁」など気にしないで自分が怖れていることをはっきり口にしているかもしれない。だが、それ以上に肝心なこと、すなわち、今日をよりよく生きようとする余裕をなくしている。それに対して、おしまは「怖ござんすけど、怖がつてばかりゐたらキリがありませんもの」と応え、いつ死ぬかわからないからこそ、その日その日を笑顔で過ごしたいと訴えるのである。

そこに、故あっておしまとの離縁を強いられた浄瑠璃の師匠・津留造がやってきて、五月二五日の山の手空襲[16]で焼け出された兄貴が「これでほッとした」と言っていたことに話題が及ぶ。兄貴は「いま〻でなまじッか荷物をかゝへてをつたゝめ、つい、それに曳きずられ、揉まなつてもいゝ気を揉み通しだつた」が、「焼けて、その未練の根がすッぱり切れた」と言っていたというのである。続く場面での、

庄吉　石に躓つまづいた機みに死神がはなれたつて話がある。……それなんだ、つまり……

津留造　さうなので。……途端に、兄貴、身についた芸をもつた自分つてものがしみ〴〵有難くなつたさうで……

というやりとりには、実際、五月二四日の空襲で焼け出された作者・万太郎の肉声が重なっている。「未練の根」をすっぱり棄てることで「死神」から逃れるという発想は、焼失したものへの「思ひ」を残すことそれ自体を強く警戒した万太郎の戒めが言わせたものだろう。庄吉はその他の場面でも、零落した大店の主人が「財布を落した」と言い訳しながら金を借りにきたことに呆れて、「人間、落ち目が大切だつてことをしみ〴〵思つたよ、今日、あの人をみて」、「つまりは見得……入らざる見得をまだ張つてるんだ……」と呟いたり、吉原の遊女・高尾太夫が手紙にしたためた「わすれねばこそ思ひださず候」という言葉を引き合いにして、「一ト筋におもひつめてゐれば、お前、夢なんぞみるセキはないぢやァないか?……」と説いたりして、「見得」を張ること、「夢」に縋ろうとすることがいかに人の目を曇らせ、現実を見誤らせるかを訴え続けるが、そうしたエピソードも含めて、「あきくさばなし」の世界には戦時下の万太郎が自宅の焼失体験から学んだ確信がさまざまなかたちで表現されているといっていいだろう。

そんなある日、ラジオから警戒警報が流れてくる。

ラジオから流れでる声　……関東地区、甲駿地区、警戒警報発令、東部軍管区司令官発令。……情報、敵一機、南方洋上より本土に接近しつゝあり。……本土到来の時刻は、概ね八時三十分頃……

……呻くが如きサイレンの遠響。……「警戒警報発令……警戒警報発令……」と呼びかはす近所の人々の声。……清治、

このうち、しかるべく店のはうへ出て行く。

庄吉（半ば自分にいふやうに）大きいぞ、今夜のは……

おせき　さうでせうか？

庄吉　うん、そんな気がする……

おせき　……（だまる）

庄吉　いざとなつたら、おせきさん、仏さまをたのむ……

おせき　……（こたへない）

庄吉　それから、おせきさん、俺のことはかまはないでくれよ。……決してかまはないでくれよ……

おせき　……

ラジオから流れでる声　情報……本日来襲の敵機は……

庄吉、おせき、耳をすます。

（溶暗……幕）

「樹蔭」と同様、万太郎はここでもラジオニュースの音声をそのまま引用して劇的効果を高める。「警戒警報発令」と呼び交わす人々の喧騒や鳴り響くサイレンの音と、家のなかでひっそりと交わされる会話のコントラストを鮮やかに構成する。さきの場面で「わらひごとぢやァない。……でなくつても、そろ〳〵大編隊のやつて来る時分なんだ。……そんなこといつて、怖くねえのか、お前？」と放言していた庄吉も、ここでは、妹のおせきに「俺のことはかまはないでくれよ。……決してかまはないでくれよ……」と訴える。

それは、自分のために誰かが犠牲になることほど辛いことはないと考える極めてまっとうな認識だともいえるし、わざわざそれを言葉にすること自体にいやらしさを感じないでもない。生き延びることへの執着を断ち切ろうとする見せ場を演じているようにもみえるし、その肩肘張った調子そのものがお涙ちょうだいの浪花節に墜しているようにもみえる。だが、いずれにしても、戦後、昭和二一年という時間を生きている万太郎にとって、それが必然性のある台詞であったことはまちがいない。かつて、空襲によって三田綱町の家を焼け出され、慶應義塾構内の食堂に避難した翌日、「朝の食事に、舌をやくやうなあつい味噌汁」を啜っているうちに、あらゆる物事への執着が消え失せていくのを実感し、それを「戦列をはなれたといつた感じ」と表現した万太郎にとって、「思ひ」を断つことと「戦列をはなれ」ることは同じ真実の表裏でなければならなかったのである。

こうして迎えた作品のラストシーン。空襲を生き延びた庄吉は、翌日、清治という店員を交えて再びおせきと会話を交わす。

庄吉　（おもはず）これで、まァ、今朝も、無事に膳のめへにす

わつて飯がくへるといふものか……

おせき　（おもはず）いつまでこんないやなおもひをしなくつちやァいけないんでせう？

清治　それァ、戦争がすまなくつちやァ……

おせき　いつすむんでせう、戦争？

清治　それァ、戦争をしてる人に聞かなくつちやァ……

庄吉　聞いたつて分るもんか。

清治　どうしてゞす？……

庄吉　いらざる見得を張つてるんだ。

清治　ぢやァ、何んのことはない、昨日来たあの金持のおちぶれだ……（ト、わらふ）

庄吉　（うなづく）さうだ。……さうなんだ……

おせき　でも、今日もまたこんなにお天気がよくつて……

清治　暑くなりますよ、今日も……ざまァみやがれ、だ……

三人、機嫌よくわらひつゝ食事をはじめる。

間。

……たま〳〵法華の行者の叩いてゆく團扇太鼓の音。

庄吉は、それまでの低徊的なやりとりを反転させるかのように、「戦争をしてる人」への痛烈な批判を加える。これほど一方的な空襲にさらされていながら戦争が終結しないのは「いらざる見得を張つてる」からだと断じる。ここでの「戦争をしてる人」とは、もちろん、為政者であり軍部である。国家と国家の政治的な思惑が複雑に絡み合ったところに遂行される戦争を、「金持のおちぶれ」の「いらざる見得」といってのけるところにこの作品の痛快さがあるといってもいいだろう。

だが、それと同時に見逃せないのは、ここでの庄吉が、「今日もまたこんなにお天気がよくつて……」、「今日も……ざまァみやがれ、だ……」と啖呵を切るおせきや清治とともに「機嫌よくわらひ」ながら食事を摂っていることである。作品の冒頭近くで、「わらひごとぢやァない。……でなくつても、そろ〳〵大編隊のやつて来る時分なんだ。……そんなこといつて、怖くねえのか、お前？……」といきり立ち、空襲のニュースが流れたときには、まるで覚悟を決めたとでもいわんばかりに、「俺のことはかまはないでくれよ」と訴えていた庄吉のなかから妙な力みがなくなり、「いらざる見得」を棄てているように見えることである。「今朝も、無事に膳のめへにすわつて飯がくへる」という喜びを、なにものに代え難いほど尊い出来事として受け容れていることである。戦争が終わった直後に戦争末期の過酷な時代を描いた万太郎は、空襲の恐怖に怯えながらも、その日その日を「機嫌よくわらひ」ながら生きた市井人たちの逞しさのなかに新たな時代への「希望」を託しているのである。

高度一万メートル前後の上空を大編隊で飛行し、大量の焼夷弾をばら撒くB29の空襲は、民間人を無差別の標的とする殺戮行為であり、直撃を受けた人々の多くは焔につつまれて焼死、行方不明となった。逆に、空襲の対象から逸れた地域にとってのそれは対岸の火事のよう

なもので、本物の空襲がどのようなものなのかを記録することは難しい。焔に囲まれながら運よく生き延びることができたとしても、その人が語れるのは自分が目撃した極めて限定的な情報であり、空襲そのものを包括的に証言することはできない。空襲は、原子爆弾と同様、その生々しい記憶を後世に伝えることのできる当事者が少なく、たとえ証言したとしても断片的、局地的なものにならざるをえない。

したがって、いま私たちが知りうる空襲のほとんどは、メディアの報道、のちの調査に基づくデータ、当事者が書き留めた限定的な記録・証言である。空襲を描いたフィクションも存在しないわけではないが、多くは、焔のなかを逃げ惑う人々、無数の死体、焦土と化した街並みに焦点があてられ、その悲惨さが俯瞰的かつ事後的に語られる。そこでは、姿すら捉えることのできない敵から一方的に焼夷弾を浴びせられ、家や家財道具はもとより大切な生命までも奪われていく被害者像が増幅し、いつ来るともわからない空襲に対して彼らはどのような対策をとりながら生活していたのか、不安や恐怖とどのように闘っていたのか、空襲警報が鳴り響くなかでどのような会話が交わされていたのか……、といったディティールがほとんど描かれない。空襲が毎日のように繰り返される戦争末期の東京にあって、人々が何を考え、どのような行動をしながら暮らしていたかということへの文学的関心は、ほとんど育つことなく現在に至っているのである。

「よこぐも」、「波しぶき」、「月の下」、「樹蔭」、「あきくさばなし」などを通じて、昭和一二年から二〇年七月までの東京を空襲というキーワードで定点観測し、人々の意識の変容をつぶさに観察した万太郎は、その意味で稀有な作家である。彼が描いた空襲は、ひとつの出来事として存在しているのではなく、戦時下という時代を覆うようにして横たわる歴史的事象として認識されているのである。

注

（1）　当時の水上瀧太郎は、父親が創業した明治生命保険会社の大阪支店副長として勤務するかたわら、「三田文学」に随筆「貝殻追放」の連載をはじめていた。連載随筆のひとつ「「末枯」の作者」（「三田文学」大正8年9月）には、「久保田君の描き出す世の中は、當然亡びゆく世の面影でなければならない。明日に連續する現在の世の中ではなくて、昨日に連續する現在なのである。從而久保田君の小説戯曲の中に現れる人物は、殆ど總て、今日の文明には何物をも貢獻しない人間ばかりだ。ただ單に亡び行く世の推移と共に押流されて行く人々である。てんでんに「世の中が惡くなつた」ことをこぼしながら、しかも此の惡くなつた世の中の茶飯事に終始して一生を送る人々である」とある。こうした水上の評は、ある意味で万太郎の作家的資質を的確に捉えているともいえるが、本稿が浮き彫りにしようとしているのは、そうした認識から逸脱した領域にある作者・万太郎のもうひとつの貌である。

（2）　五二五機のB29が麹町、麻布、牛込、本郷方面を襲い、約六五〇〇〇戸が消失した。翌日の山手大空襲と併せて、東京の閑静な住宅地にも大きな被害をもたらした。

（3）　戸板康二が作成した「久保田万太郎年譜」（『久保田万太郎』文藝春秋・昭和42年11月）、安住敦編の「年譜」（『久保田万太郎全集 第十五巻』中央公論社・昭和43年6月）をはじめ、多くの伝記資料では母・ふさが「終戦の日」に亡くなったとされているが、万太郎自身は「私の履歴書」（前掲）で昭和二〇年の「七月、母をうしなふ」と記している。

（4）　この日、「あつい味噌汁」を提供してくれた慶応義塾の食堂は、翌日（昭和20年5月25日）の空襲で焼失することになる。万太郎は「慶応義塾九十年祭」（発表誌未詳、のち『よしやわざくれ』青蛙房・昭和35年11月に所収）のなかで、「山の食堂で、舌をやくやうなあつい味噌汁で、三分づきのたきたてを御馳走になつた。／だれも、あかるい顔で、山の上の無事を祝福し合つた。／が、それも、いへば束の間のゆめだつた。そのあくる日のその時間には、山の上も、ひきつゞいての空襲の、雨とふりそゝいだ焼夷弾のぎせいになつて、図書館も、大ホールも、無惨に焼けたゞれたむくろをよこたへてゐたのである」と回顧している。

（5）　昭和一七年五月、「国家の要請するところに従つて、国策の周知徹底、宣伝普及に挺身し、以て国策の施行実践に協力することを目的として、大政翼賛会と内閣情報局の指導で発足した。会長は徳富蘇峰、会員は三〇〇〇名以上。当初は小説、劇文学、評論随筆、詩、短歌、俳句、国文学、外国文学の八部会だったが、のちに漢詩・漢文が加わる。万太郎が幹事を務めた劇文学部会は部会長が武者小路実篤、理事が山本有三だった。

（6）　万太郎は東京中央放送局文芸課長だった昭和八年に岸田國士にラヂオ放送用の「空襲ドラマ」の執筆を依頼している。依頼を受けた岸田は、それが「防空演習」にちなむ宣伝活動であることを知りつつ、「あらゆる音響効果を使ひ得る何よりの機会」だと考えて受諾する。このときのことを「空襲ドラマ」（「帝国大学新聞」昭和8年8月7日）という随筆にまとめた岸田は、そのなかで、「なにしろ、東京の空へ敵の飛行機がやつてくるといふ想像は、これはまあつくとして、いよいよさうなつた場合に、われわれ市民は、どの程度まで「しつかり」してゐられるだらうか。これは甚だ見当がつけにくい。阿鼻叫喚といふやうな「音響効果」は、空襲の惨状を写すに、是非ともなくてはならぬものかどうか。日本国民の名誉のために、果して手心を加ふべきかどうか？ 僕は迷つた」、「敵の飛行機を迎へ撃つわが防空部隊の活躍はどんなものであらう。敵味方の空軍入乱れての戦闘は、音響的に、生彩ある幻象を作ることがこれまた相当困難であらう。せめて、地上部隊、即ち、高射砲、高射機関銃の実弾射撃でも観て置いたらと思ひ、この方は、放送局を通

じ、警備司令部石本参謀の斡旋で、千葉海岸飯岡における、砲兵学校高射砲隊の演習を観せてもらふことができた。普通、大砲の音といへば、「ドーン」にきまつてゐると誰でも思つてゐようが、なかなかそんな単純なもんぢやない。少くとも傍で聴いてゐると、なるほど、これでなけれやならんといふ感じの音である。重量と圧力と速度の混り合つた一種生々しい金属音である。しかも、この発射に伴ふ瞬間の爆音が、弾丸の空気を裂く凄壮な擦音につながり、更に一団の白煙を残して目標真近にさく裂する明朗快活な爆音に終る三段の経過は、砲戦描写に欠くべからざる手法だと気がついた」と記している。こうしたやり取りからも、万太郎が早くから東京が空襲に遭うというイメージを持ち、その恐ろしさを伝えようとしていたことがわかる。

（7）

万太郎は満洲旅行の旅程を「満洲日録抄」（「中央公論」昭和17年7月）にまとめている。その末尾には「そのときわたくしは何をみたか？ 縷紅亭によつてなじみになつたこの国に於けるある層の日本人たちを、である。この国に於けるある層の日本人たちの生活を、である。／そしてかれらの一人は当年の志士であり、／かれらの一人は落語家上りのてんぷらやであり、／かれらの一人は吉原のいまは亡き名妓の養女であり、／かれらの一人はきはめて腕のいゝコックだつた。／この人々が果してこの国をどうみてゐるか？／この国の人々をどうみてゐるか？／途端に、わたくしは、ハルピンで逢つた市橋君をおもひだした。……同時にキタイスカヤの古風なロシヤ家屋の間に、はづかしくもなく、大きな、むめんもくな、みッともない限りの看板をだしてゐるおでんやだの小料理屋だのをおもひだした。……／わたくしは演出家としてこんどの一行に加はつた。が、このこたへをだすためには作者として何んらかの運算をしなければならないかも知れない」とある。「はづかしくもなく、大きな、むめんもくな、みッともない限りの看板」という表現からは、満洲国の「建国」を策謀する日本およびこの土地に渡った日本人たちへのシニカルな視線が伝わってくるが、それに続く文面で「こたへをだすためには作者として何んらかの運算をしなければならないかも知れない」と言葉を濁しているところに、当時の万太郎が置かれていた微妙な立場が露呈している。なお、のちに『久保田万太郎全集 第十二巻』「後記」好学社・昭和23年10月）で「満洲日録抄」に言及した万太郎は、「いまにして思ふ、満洲といふところは哀しいところだつた。こゝでみると鳩も鴉にみえた」と記している。また、上海旅行の方は、「上海書留」（「東京新聞」昭和19年1月28日～30日）で詳細を語っている。なお、日本文学報国会の担当としてこの旅行を斡旋した河上徹太郎は、この旅行に関して、「誰か新劇方面に詳しい文学者を一人寄越してくれないかなあ、中国人は実に芝居ずきで、上海では演劇が盛だから、という話だったので、私は久保田万太郎に相談すると、誰かを推薦するかと思ったら、

私がひとつ行きましょうと乗出して来た」（『文学的回想録』朝日新聞社・昭和40年4月）と証言している。

（8）　戸板康二『久保田万太郎』（前掲）には、「昭和二十一年二月、帝国劇場で前進座が上演した「能因法師」（岡本綺堂）の演出者として、稽古に入り、吉祥寺の劇団の中にある「倶楽部」と呼ばれる数寄屋造りの家に寝泊りしていた万太郎が、一月十五日に築地の日本演劇社から出て、「錦水」の前で安藤鶴夫にあい、そのあと、銀座四丁目の停留所の前で俳優の久保春二にあい、二人の口から「三年間の執筆禁止だという話ですよ」と聞かされた。「演劇界」昭和三十一年一月号の座談会「新春清談」では、自身その日のことを語っている。／その日、どこからか流れた情報がいろいろ本人の耳にはいったわけだが、ぼく（戸板康二―筆者注）の日記にも、その日執筆禁止の噂が出たのは万太郎のほか、八木隆一郎、菊田一夫、中野實、北條秀司と書いてある。／文壇人、劇壇人の一部が、戦争に協力したという理由で、敗戦によってはじめて人権を回復したグループから指弾されていた時代である。／結局万太郎は、パージにはならなかった。そして、句集には残っていない「春浅き噂根も葉もなかりけり」という句を、苦笑とともに云いすてたのである」と記されている。

（9）　「中央公論」（昭和14年8月）に「三人」第一部「一トしぐれ」として発表したのち、改稿補筆して小山書店が昭和一八年六月に発行した「八雲」第二輯に「波しぶき」として発表

（10）　万太郎は「月の下」について、「昭和十八年作、小山書店から、〝文学新輯〟といふシリーズの一篇として、すぐに単行本で出した。……といつても、戦況日に苛烈、何もかも不自由になりきつた時代である。書いたのは昭和十八年でも、本の出来たのは、それから一年を経た十九年の十月だつた。／空襲におびえた東京の町々を照らしだした月のひかりが、わたくしに、この作を書かせたのである。……そのくせ、このときは、日本も空襲はまだはじまつてゐなかつたのである」（『久保田万太郎全集 第十巻』「後記」好学社・昭和24年10月）と述べている。

（11）　万太郎は「東京新聞」からの引用に際して、部分的な削除、補筆、中略、改稿を施している。たとえば、ここに引用した後者の記事は七月一六日付「これが世界の戦勢だ 大陸に基地撃滅戦 敵、海より迫る」という記事の一部だが、引用部分に続いている「一億体当りへ」という見出しの内容などには触れられておらず、大本営が煽動する玉砕主義に関する内容などは意図的に回避されていることがわかる。

（12）　アメリカ軍のB29爆撃機がはじめて日本の本土を空襲したのは、昭和一九年六月の八幡空襲（中国の成都基地から飛び立ち、八幡製鉄所を襲った）とされている。同年、サイパン島をはじめとするマリアナ諸島を攻略したアメリカ軍は一一月以降、さらにB29を増強し、日本の主要都市への大規模な空襲を繰り返

す。東京への空襲は昭和一九年一一月二九日の初空襲（中島飛行機武蔵製作所が主な標的）以降、翌昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲、同年五月二五日の山手大空襲まで約一二〇回にも及んでいる。

（13）　万太郎は「樹蔭」の連載を始めた頃にひとり息子・耕一の応召を体験している。「心残りの記」（「文藝春秋」昭和32年7月～9月）にはそのときの思い出が、「突然、赤紙が来た。……陸軍二等兵として、かれは、麻布の東部第六部隊に拉しられた。（中略）勿論、ぼくは送つて行かなかつた。……送つて行くかはりに、〝親一人子一人螢ひかりけり〟といふ句を、ぼくは、ひそかに、メモに書きとめた。／昭和十九年の六月だつた。」と記されており、「樹蔭」の設定もその体験を踏まえていることを吐露している。

（14）　「日本演劇」（昭和20年8・9月合併号、執筆は昭和20年6月）。『久保田万太郎全集 第十八巻』「後記」（好学社・昭和24年5月）に、「五月二十四日の早暁、三田を焼出されたとき、手まはりのものを入れた鞄だけ一つもつて出た。その中に入れてあつたのがこの戯曲の、行悩みになやんだ書きかけだつた」とある。

（15）　放送予定日が八月一五日だったため、結局、放送されないままお蔵入りとなった。

（16）　東京空襲の総仕上げという位置づけで、赤坂、青山、中野などの地域とともに、はじめて皇居も標的となった。この空襲では三月一〇日の東京大空襲の倍近い三二五八トンもの焼夷弾、四トンの高性能弾が投下されたが、死者数は前者の一一万五〇〇〇人以上に対して三五九六人（帝都防衛本部情報）、焼失建物一二六七三七棟だった。警視庁消防部が発表した火災発生及延焼状況に「本空襲ハ主トシテ劃域焼夷ヲ行ヒタルモノニシテ爆弾及油脂　エレクトロン　黄燐等各種ノ大小型ヲ極メテ濃度ニ混投セル絨毯爆撃ニシテ民防空ハ最近ニ於ケル徹底且大規模ナル空襲ニ其ノ戦闘意識ヲ殆ンド喪失シ居リ為メニ初期防火全ク行ハレズ火災ハ全被弾地域ニ及ビ加フルニ折柄ノ強風ニ煽ラレ一大火流ヲ現出シ帝都ノ大部ヲ焼失スルニ至レリ」とあるように、この時期すでに疎開が進んでいたこと、火災の類焼を防ぐための建物解体が進んでいたこと、消火活動よりも避難を優先するように指示がなされていたことなどが死者数の違いになって表れたと考えられている（以上、『東京大空襲・戦災誌』第2巻、第3巻（財団法人 東京空襲を記録する会・昭和48年3月、11月）より）。

※　本稿は、久保田万太郎の諸作品を横断的に読み解くことを目的としているため、作品の語り手に関しては、便宜的に、すべて「万太郎」という表記で統一している。

（いしかわたくみ　本学教授）